



めたせこいあ

至 創 努 校
誠 造 力 訓

島根県立吉賀高等学校 〒699-5522 鹿足郡吉賀町七日市 937
電話 (0856)78-0029 FAX (0856)78-0742
HP アドレス <http://www.yoshika.ed.jp/>

「いつの日かふるさと吉賀町を支える人材(財)の育成」をめざして

吉賀高等学校 校長 齋藤雅典

真田グラウンドが人工芝のグラウンドに生まれ変わったことを記念して、およそひと月間にわたってイベントが続きました。11月3日には、八久呂太鼓やよさこい踊りが披露されてオープンを祝いました。そして、鹿足サッカースクールU-15・吉賀高校合同チームがサンフレッチェ広島U-15と試合をしました。その後の週末には、なでしこ2部リーグのチーム、大社高校、米子北高校、立正大湊南高校、九州国際大附属高校の招待試合などがありました。その間、保護者の方は豚汁で来場者をもてなし、たくさんの地域の方が様々な形でイベントを応援されました。

子どもたちが地域の方の指導と支援で動いている様子は、サクラマスプロジェクトの活動そのものだと私は思いました。サクラマスプロジェクトは「豊かな学びや体験」「豊かな人との関わり」をキーワードに、学校・地域・家庭が協働して子どもたちを育てようというプロジェクトです。地域で大切にされ、豊かな体験をして育った子どもたちは、いつの日かきっと吉賀町を支える人になるだろう、このような思いがあります。イベントに参加した子どもたちは、全国的な強豪チームとゲームをするなど、普通ではできない体験をしました。私は、地域でこのように育てられてきた吉高生は、自己肯定感(自分が大切だと思われる感覚)が高いと感じています。しかし、将来実際に吉賀町を支える行動ができるためには、高校としてさらになすべきことがあります。

『田園回帰1%戦略 地元の人と仕事を取り戻す』(藤山浩 著)という本があります。著者の藤山先生(島根県中山間地域研究センター研究統括監)は、以前吉賀高校に来られたことがあります。「田舎の田舎」では若い人が増えている、ヨーロッパでは豊かな暮らしを求めて田舎に住む人が増えているのに、日本では「東京すごろく」(人口が多く利便性の高い都会をめざすこと)が続いている、などという言葉を感じます。先生は「日本創生会議」による「市町村消滅論」へ疑問を投げかけ、地域活性化への具体的な戦略を示されています。

サクラマスプロジェクトの高校での取り組みでは、「将来」を「すぐ先の自分の未来」として現実的に考える学習が求められます。卒業後に生徒が旅立っていく社会は、藤山先生が言われるように、大人が経験した社会とは異なるものです。そのことを前提として、「聞き書き」は今の吉賀町の良さや課題を発見し、「アントレプレナーシップ教育」では、経済的に自立しつつ自分に何ができるかを考える学習でありたい、そのように考えます。

そして、そうした学習が成立するためには、まず教師が、今の社会の変化を学ぶ必要があります。私自身、以前は都会の偏差値の高い大学に入学することが子どもの幸せにつながると単純に考えていたところがありました。そして、今も、「東京すごろく」に囚われている教師は多いだろうと想像するからです。さらに、吉賀高校に関していえば、今後も多くの入学者(最低でも21人)を確保していく必要があります。サクラマスプロジェクトで学ぶ高校生は多い方が良く、さらに、万が一地域から高校が失われるようなことになれば、大きな痛手になるだろうと考えるからです。

参考：平成30年度までの高校の統廃合基準では、「在籍生徒数が収容定員の5分の3に満たず、しかも、将来にわたって生徒数が増加する見通しが立たないと見込まれる場合には、原則として生徒募集を停止するか、近隣の高校へ統合するかを適当な時期に検討する。」とされています。中山間地域の1学年1学級の吉賀高校の場合は、収容定員を1学級あたり35人と見なされて、35人÷5×3=21人となります。

2 学 期 校 内 球 技 大 会

12月8日に校内球技大会が行われ、今回も白熱した試合が繰り広げられました。生徒や教員の応援の音が体育館に響き渡り、決勝戦では大きな円陣も組まれました。

【男子バレーボール結果】	優勝：3年生Aチーム	準優勝：3年生Bチーム
【女子バレーボール結果】	優勝：3年生Aチーム	準優勝：2年生Aチーム
【男子バスケットボール結果】	優勝：3年生Aチーム	準優勝：3年生Bチーム
【女子バスケットボール結果】	優勝：2年生Aチーム	準優勝：3年生Aチーム



吉賀未来グラウンド オープニングイベント 招待試合

11月15日(日)に全国高校サッカー選手権大会島根県代表校の大社高校と、鳥取県代表校の米子北高校を迎えて、招待試合が開催されました。全国レベルの技術力やフィジカルに圧倒され、結果的には歯が立ちませんでした。吉賀高校の生徒も多くのことを感じ、学び取ることができました。また、11時半から行われた米子北高校対大社高校の試合は、多くの観客の方の声援にも支えられ、見応えのある試合になりました。

また、12月6日(日)には、立正大学湊南高校と九州国際大学附属高校の一年生、益田のクラブチームであるボアソルテ美都を招き、吉賀高校、鹿足SSの合同チームと試合を行いました。一年生とは思えぬ力強さやテクニックの高さでした。吉賀高校の新チームにとって良い刺激となりました。

これからも多くの練習試合や公式戦がこのグラウンドを会場に行われると思います。地域の方々に愛されるチームを目指して、日々努力していきますので、ご声援よろしくお願ひします。



環境公開講座

12月4日(金)午後、吉賀高校公開講座「地域木質バイオマス資源の賢い利用法」が実施されました。吉賀町の9割を占める森林をどう活用していくかは、吉賀町の将来を考える上でもとても大きな問題です。島根大学の生物生産工学科教授の小池浩一郎先生をお招きして、森林をエネルギー資源として、賢く利用していく方法について講義していただきました。本校グリーンライフコースの生徒5名を含め、全体で20名前後の参加人数でしたが、地域の方よりの熱心な質疑応答もあって盛会となりました。森林を活かす取り組みはこの地域の発展の核となるものであり、電気エネルギーばかりに関心が集まる中、熱給湯に注目したお話など、とても新鮮なものでした。



以下は、生徒の感想文からの抜粋です。
「私たちがハンセン病の知識をもって、それをまとめて発表するなどして、知らない人に伝えていきたい。」
「自分と祖母の2つの視点から考えや言葉を選んでいかなければならないのが、とても難しかったです。」
「私は将来、結婚差別だけでなく、いろいろな差別と立ち向かうことができる心と正しい知識を身につけていきたいと思います。」



合同柔道開始

今年も12月18日から吉賀高校の武道場で専門の講師の先生による柔道の授業が始まりました。まずは10日に町内四中学校の三年生が集まり、実施しました。この日は比較的气温も高く、生徒達は一生懸命体を動かし、楽しく柔道を学んでいます。柔道は日本発祥のスポーツの一つです。柔道の理念は「精力善用・自他共栄」。自分の力を様々な場面で良い方向に向くよう効果的に使い、そして皆でがんばっていくという意味です。柔道の授業を通して学んでもらえればよいと思います。



デートDV防止教室

11月17日に本校視聴覚室にてデートDV防止ますだより講師を2名お招きし、デートDV防止講座が行われました。対象は本校の3年生29名と3年会の教員で、高校生年代の間で起こっているデートDVの事例などを用いてケーススタディを行い、準備されたシナリオを元にロールプレイも体験しました。まもなく社会へ出て行く3年生はデートDVの被害者のみならず加害者にもなる危険性を学び、もしその当事者になった場合には公的機関への相談が重要であることを改めて認識したようでした。

中高一貫教育だより -吉賀地域中高一貫教育事務局(島根県立吉賀高等学校内) -

中高一貫教育コーディネーター 春日亮二

小学生向け科学実験教室は中高理科教育の魅力満載！

12月1日(火)に町内の小学生(5・6年生)を吉賀高校に招いて科学実験教室が開催されました。今年は、昨年よりも更にグレードアップし、吉賀高校の理科の先生方のアイデアでミニ天体望遠鏡を作りました。また、中学校の理科の先生方には、毎年大人気の液体窒素を使った実験を紹介していただきました。いずれも普通の授業ではなかなか味わえない体験です。吉賀町内には、このような魅力的な授業ができる理科の先生方がたくさんいらっしゃいます。小中高が連携して「理科の面白さ」をますます広げていきたいと考えています。



心の扉 ～ 人権・同和教育～

12月15日(火)7限に人権・同和教育ホームルームの公開授業を実施しました。内容は次の通りです。

- 1年生「ハンセン病問題に関する差別から学ぶ」
- 2年生「差別的な言動に遭遇した時にとる行動を通じて学ぶ」
- 3年生「結婚差別から学ぶ」

公開授業に向けて、教職員研修の中で、各学年の実態を踏まえた学習指導案の協議と検討を行いました。

1年生はビデオ教材を使ってまずハンセン病の知識を学びました。そして、8月に香川県高松市の大島青松園に訪問して、大西さんと交流をしてきた秋山さんと泉さんの生徒2名が、スライドを使って研修報告と感想を述べてくれました。聞いていた生徒も身近な問題として捉えてくれたようです。2年生は差別を阻止するためのシナリオを個人で考え、伝え合い、グループで発表をすることで自分の考えをみんなと共有しました。3年生は「結婚差別」を扱い、将来にある身近な差別事象を題材にして、差別をする人とされる人のそれぞれの気持ちについて考えました。差別の問題を自らの問題として問い直し、解決に向かう態度を身につけました。